

群 教 セ	F08 - 01
	平23.243集

# 対人関係の適応感を高める授業づくり

— グループ・プロセスの振り返りを教科の授業に取り入れて —

長期研修員 青木 栄二

## 《研究の概要》

本研究は、生徒が主体的に学び合う中でよりよい学習集団としての雰囲気を作成し、生徒の対人関係の適応感を高めていくことを目指したものである。そのために、学級活動において、「聴く」「伝える」についてのスキルトレーニングを行うと共に、教科での学び合い活動において、グループワークの振り返りを行った。このことにより、生徒は自己理解・他者理解を深め、互いに認め合う学級の雰囲気を作成していった。

**キーワード** 【対人関係 グループ活動 振り返り 自己理解・他者理解 中学校】

## I 主題設定の理由

学習指導要領解説「特別活動編」には、「近年、都市化、少子高齢化、地域社会における人間関係の希薄化などが進む中で、家庭や地域社会において社会性を身に付ける機会が減少している。また、情報化の進展より、間接体験や疑似体験が膨らむ一方、望ましい人間関係を築く力などの社会性が身に付けにくくなっている。このような状況の中で、生徒の対人関係が未熟なままに、協力してよりよい生活を築くことができないことや社会性の未熟さが、いじめや不登校、暴力行為などの一因になっていることも指摘されている」そのために「学校における望ましい集団活動や体験的な活動を一層充実することが重要である」と示されている。

ところで、生徒が集団活動や体験的な活動を日常的に経験できる場面は、授業である。これらの現状を踏まえると、学校生活の大半を占める授業を通して、生徒に社会性をはぐくませる必要があると考えた。「子どもたちの輝く笑顔のために」（群馬県教育委員会平成23年9月）の視点5「学び合いを大切にしたい授業づくり」では、子どもたちが学校生活に主体的に取り組む意欲や態度を培うために、生徒指導の3つの機能（「自己決定」の場を与える授業、「共感的人間関係」を基盤とした授業、「自己存在感」を与える授業）を活かした授業づくりの重要性を示している。生徒指導は、問題が起こってから対応することも大切であるが、それ以上に問題が起こる前に未然に予防するための取組が大切である。

しかし、協力校においては、グループ活動や伝え合い活動が一般的に授業に取り入れられているものの生徒同士のかかわりが不十分であったり、特定の生徒に発言が偏ったりするなどして、学び合いが十分に深まらない様子が見て取れる。そのため、教師が学習内容を一方的に伝達するような授業になったり、特定の生徒との対話によって進んでいくような授業になったりすることもある。生徒が主体的に学ぶ授業づくりのためには、生徒指導の機能を活かし、生徒一人一人が、安心して発言できる学習集団としての雰囲気づくりと、授業を通じた人間関係づくりが必要であると考えた。

そこで、本研究では、グループでの学び合いが活発に図れるように、対話への意欲を高めるスキルトレーニングを学級活動の時間に行う。そして、学んだスキルを教科の授業で活かしながら、グループでの学び合いを行う。これにより、生徒は互いに協力しながら、活発に活動に取り組むようになると考えた。また、授業の終末場面において、グループ・プロセスの振り返りを行うことにより、生徒は仲間からのフィードバックを受けて自分と他者とのかかわりの中で影響し合っていることに気付く。この気づきが生徒の行動変容につながると共に、互いに認め合う学級の雰囲気を作成していく。そして、その結果、生徒の対人関係の適応感が高まると考え、本主題を設定した。

## II 研究のねらい

各教科の授業において、グループ・プロセスの振り返りを取り入れたことが生徒の対人関係の適応感

を高めることに有効であるかを実践を通して明らかにする。

### Ⅲ 研究の見通し

- 1 学級活動において、「聴く」「伝える」に視点をおいたスキルトレーニングを計画・実践したことは、生徒の対話への意欲を高めると共に共感的な人間関係の基礎を築くのにも有効であろう。
- 2 教科の授業において、学んだスキルを活用しながらグループ活動を行う。また、グループ・プロセスの振り返りを行うことにより、生徒は自己理解・他者理解を深めながら互いに認め合う雰囲気を形成すると共に対人関係の適応感を高めることに有効であろう。

### Ⅳ 研究の内容

#### 1 対人関係の適応感を高める授業について

##### (1) 「対人関係の適応感」とは

「対人関係の適応感」とは、学級で教師や友人から、「サポートを受けられる」「認められている」と感じている程度のことである。例えば、自分が困ったときなどに助けてくれる、支援してくれると感じていれば、適応感が高くなる。また、無視やいじわるなどをされていると感じていれば、適応感は低くなる。このように、生徒自身が主観として感じる程度を示したものである。また、対人関係の適応感が高まるということは、学級の中で自分の行動が仲間から共感的に受け入れられていて、自己存在感を感じて生活できていることである。適応感が高まると、生徒は主体的にかかわり合いながら、学び合うようになる。その結果、生徒の学力向上にもつながると考えられる。

##### (2) 「対人関係の適応感を高める授業」とは

授業の中で対人関係の適応感を高める手立てとして、協同的なグループでの学び合いを取り入れる。生徒は其中で、対話を通して、互いの考えを交流・共有していく。そして、グループ・プロセスの振り返りを行うことで自分と仲間の感じ方やとらえ方の違いに気付く。この気づきが、生徒の自己理解・他者理解を深めると共に、生徒の行動変容につながる考えた。このように、かかわりの中でよりよい人間関係を築きながら、互いに認め合う学級を形成していく授業を「対人関係の適応感を高める授業」としてとらえた。

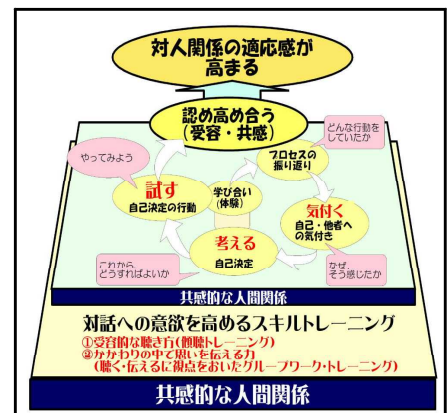


図1 対人関係の適応感を高める授業

#### 2 グループ・プロセスの振り返りについて

##### (1) グループ・プロセスとは

グループ・プロセスとは、メンバーの心理的なつながり具合や相互影響関係、集団機能・役割の分化、コミュニケーションの質と量、意思決定のスタイル、目標や課題達成の手順と時間管理、グループの風土や規範などが、活動中どのように変化していたかということである。

##### (2) グループ・プロセスの振り返りの項目と振り返りの仕方について

グループ・プロセスの振り返りの項目は、

- ① 自分に対する項目「自分の考えをしっかりと言えた」「自分の意見を聴いてもらった」など
- ② グループに対する項目「グループはまとまっていたか」「リラックスしていたか」など
- ③ 活動中の行動に対する項目「意見を言いやすくしてくれたのは誰か」など

このように自分、グループ、行動に対する項目を振り返りシートに記入することで個人の振り返りを行う。その後、グループの中で互いの思いを伝え合う活動において、互いのフィードバックを受け、自分のよさや仲間の支えに気付くように振り返りを行う。

### (3) グループワーク・トレーニングについて

グループワーク・トレーニング（以下、GWT）はグループ・プロセスの研究の基となるラボラトリー・トレーニングの学習理論に基づいて開発されたものである。そのため、組織づくりと自己発見にねらいがおかれている。すなわち、グループの中で「協力するとはどういうことかに気付く」ことにねらいをおき、その中で自己理解・他者理解を深めていくものである。また、このGWTを学校教育の中に取り入れ、開発されたものが学校GWTである。学校GWTの内容は、「情報を組み立てるGWT」「力をあわせるGWT」「聴き方を学ぶGWT」「コンセンサス（合意）のよさを学ぶGWT」「友だちからみた自分を知るGWT」などがある。

GWTのおおよその流れは、以下の通りである。

- ① ある課題にグループで取り組み、解決する
- ② 課題を解決しているとき、グループの一人一人はどのようなことをしていたかを振り返る
- ③ 振り返ったことを教師がまとめ、日常生活に一般化するように示唆する

特に振り返りの場面が重要とされ、振り返りでは個人の振り返りに加え、グループの振り返りを行うことが特徴である。また、グループ・プロセスの振り返りではグループの一員として、適切な行動をとることができていたかどうかを課題達成機能、集団維持機能などの観点から振り返りを行う。具体的には「課題達成に役立つ意見を出したり、解決策を出したり、それぞれの意見をまとめたりする活動をした人は誰か」「メンバーに意見を述べるよう促したり、意見を言いやすい雰囲気を作り出すなどの行動をしていたのは誰か」などの項目によって、グループ活動での自分と仲間に対する気づきを促していく。これにより、生徒は「今、ここ」での自分の姿（自分の行動、態度、発言など）を認知していく。また、自分や仲間のものの見方や考え方、価値観などにも気付いていく。生徒はグループ活動を通して、自己理解・他者理解を深めていくと共に、自分が仲間から支えられていることやグループに貢献していたことに気付いていく。このようにGWTはグループの機能を高めていくことで、グループのメンバーの行動変容を促しながら、人間関係を築く力を育成していくものである。このトレーニングの流れとグループ・プロセスの振り返りを教科の授業にも取り入れていき、互いに認め合う学習集団を育成したいと考えた。

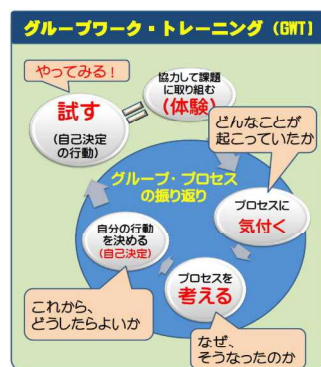


図2 学校GWTの流れ

### (4) グループ・プロセスの振り返りを教科の授業に取り入れるとは

教科の授業での学び合いが機能するためには、教師と生徒や生徒相互の対話が基盤になる。対話とは、互いの考えや思いを伝え合う中で知識や技能を交流・共有していくことである。そこで、対話への意欲を高めるために、ステップ1では対話の基盤となる「聴くスキルトレーニング（傾聴トレーニング）」を行う。生徒はロールプレイを通して、受容的に聴いてもらうことで「うれしい」「話しやすい」という肯定的な感想をもつだろう。また、この聴き方を般化するために、各教科や帰りの会などで聴き方練習を行う。ステップ2では「聴く・伝える」に視点を当てたGWTを行う。その活動で生徒は仲間がもっている情報を聴いたり、自分のもっている情報を伝えたりすることで、グループで課題を解決する楽しさや喜びを味わう。そして、最後にグループ・プロセスの振り返りを行うことで仲間と協力することや役割を果たすことへの意義に気付いていく。そして、ここで学んだスキルを活かし、教科（理科）の授業実践を行う。教科の授業1ではステップ1で習得した「聴くスキル」とステップ2で習得したGWTのグループでの話し合いの中で協力す



図3 研究構想図

るスキルを活用して、グループでの意見の交流を主とした学び合いを行う。教科の授業2では、ステップ1の「聴くスキル」とステップ2の「情報を組み立てるGWT」の体験を活かし、協力して実験と考察を行う。また、グループ活動中のグループ・プロセスの振り返りを行う。そこで生徒に活動中の自分やグループの様子に気付かせることにより、自己理解・他者理解を深めさせると共に、次の活動のめあてをもたせていく。このようにグループ・プロセスに視点において、グループの中の「今、ここ」での自分に気付き、考え、行動することにより、生徒一人一人が自己存在感を高め、互いに認め合う学級集団が育成でき、それと共に生徒の対人関係の適応感が高まると考えた。

## V 研究の計画と方法

### 1 実践計画

対象	中学校1年〇組 (33名)	期間	10月4日～11月8日
時間	学級活動2時間 教科(理科)2時間	指導者	長期研修員 青木栄二

### 2 検証計画

	検証の観点	検証の方法
見通し1	学級活動において、「聴く」「伝える」に視点をおいたスキルトレーニングを計画・実践したことは、生徒の対話への意欲を高めると共に、共感的な人間関係の基礎を築くのに有効であったか。	○学級の雰囲気と自己肯定感を把握する質問紙『C&S質問紙』において実践前後における学級の雰囲気を比較する。 ○学校環境適応感尺度『アセス』において対人関係の適応感の変化の比較する。
見通し2	教科の授業において、学んだスキルを活用した学び合い活動において、グループ・プロセスの振り返りを行ったことは、生徒に自己理解・他者理解を深めながら、互いに認め合う雰囲気を形成させると共に、対人関係の適応感を高めることに有効であったか。	○授業中の生徒の様子(ビデオ)や授業後の生徒の感想から判断する。 ○学級担任(教科担当)などの感想を基に検証する。

### 3 研究計画(A:研究者 B:学級担任 C:教科担当(理科) ◎主担当) ☆生徒指導のねらい

実践内容と 実践教科(時間)	指導者			実践時期 (期間)	ねらいや内容
	A	B	C		
事前調査(質問紙)	○	○		9月中旬	学級や生徒の実態を客観的に調査する
ステップ1 (学級活動)(1時間) 「上手な話の聴き方」 (ソーシャルスキル)	◎ T1	○ T2		10月4日	☆上手な話の聴き方のスキルを習得する。 ☆話を受容的に聴く体験や聴いてもらう体験を通して、対話への意欲を高める。 (自己理解・他者理解)
ステップ2 (学級活動)(1時間) 「グループでの協力の仕方」 (情報を組み立てるGWT)	◎			10月14日	☆課題を解決するために自分のもっている情報を正確に伝えたり、正しく聴いたりする中で話し合いのスキルを学ぶ。 ☆グループで課題を解決することで仲間とかかわりながら学ぶことの楽しさを味わうことができる(協力・共感的な人間関係づくり)。
ステップ1の習得 (帰りの会など) 「上手な話の聴き方」		○		10月13日～ (計4回)	☆2人組で「上手な話の聴き方」(傾聴トレーニング)の練習を行い、聴き方のポイントを活用できるようにする。
教科(理科)(2時間) 単元:身の回りの物質とその性質	○ T2		○ T1	10月25日 27日	「金属と金属でない物質を区別するには」 ☆実験時のグループのつくり方と実験台と相談台及び実験時のルールを確認する
教科(理科)(2時間) 単元:身の回りの物質とその性質	◎			11月7日 8日	「白い粉末状の物質を区別するには」 ☆グループで自分の担当した役割を果たしながら、課題を解決することで、グループ内での存在感を感じさせるとともに自発的に学習に取り組むようになる。
事後調査(質問紙、担任、教科担当からの感想)	○	○		11月中旬	学級や生徒の実態を客観的に調査する。 教師の見取りから、検証をする。

## VI 研究の結果と考察

### 1 見通し1について

#### (1) 授業実践1「対話への意欲を高めるスキルトレーニング」

##### ① 学級活動Ⅰ(ステップ1)『上手な話の聴き方』

###### ア 活動のねらい

- 上手な話の聴き方のスキルを習得する。
- 話を受容的に聴く体験や聴いてもらう体験を通して、対話への意欲を高める（自己理解・他者理解）。

###### イ 活動の内容

教師が行った「無関心な聴き方」と「関心のある聴き方」のロールプレイを見て、二つの聴き方の違いを非言語的な面も含めて気付いたことを生徒が発表した。話し手が話しやすくなる聴き方にはどのようなポイントがあるかを考えさせてから、全体で確認した。その後、ポイントを意識した話の聴き方の練習を1分間で話し手と聴き手を交代して行った。振り返りカードに記入し、互いに話の聴き方の評価を行うと共に、話を聴いてもらったときの気持ちを伝え合った。

上手な話の聴き方のポイント		難 度	「上手な話の聴き方」シナリオ
基本 レベル	① 話し手の方に体を向ける	☆☆☆	私の好きなこと・好きなものは( )です。 どうしてかというを
	② 話し手の顔を見る	☆☆☆	
	③ 最後まで話を聴く	☆☆☆	
達人 レベル	④ 手を見や手いたずらを見せない	☆☆☆	2 私の好きな動物は( )です。 どうしてかというを
	⑤ タイミングよくうなずいたり、相づちをうったりする	☆☆☆	
	⑥ 最後に質問や感想をつけたず	☆☆☆	
	⑦ 話しやすいう雰囲気をつくる	☆☆☆	

図4 聴き方のポイント(振り返りカード)とシナリオカード(抜粋)

###### ウ 活動の様子

始めは、シナリオカードを見ながら話していた生徒も自然と話し声が大きくなっていった。時間がたつにつれ、話し声が教室全体に広がっていた。上手な聴き方のロールプレイの相互評価では、カードに評価を記入した後に互いに感想を伝え合う姿が見られた。また、聴き手を交代して行った2回目では、最初から全体的に話し声が大きく、身振り手振りをしながら話す生徒も見られた。1分後、時間を知らせるベルが鳴っても話し続けるペアもあった。振り返りの場面では、四人一組のグループに別れ、一人30秒間、話を聴いてもらったときの感想を発表した。その際にも、上手な話の聴き方を意識して、うなずいたり、相づちを打ったりしながら発表を聴いていた。

###### (授業後の生徒の感想)

- これまであまり「聴く」ということを深く考えたことがなかったので、今回の授業で学ぶことがたくさんあった。私は話しやすい雰囲気をつくれるかどうか心配でした。話しづらかったりすると、途中で話が途切れてしまうし、相手側も焦ってしまうと思うので、気を付けて相づちを打ったり、質問したりしたいと思った。
- しっかり質問したりすると新しい発見があった。こっちの話を顔を見て聴いてくれるとうれしかった。相手も同じように思うのであれば、これから話を聴くときには、しっかり話し手の目を見て聴こうと思う。
- 今日、隣の席の人とあらためて話してみて、その人のことが少し分かったような気がする。以外と楽しかった。これからは、もっと相手の目を見て話したいと思う。

###### (担任の感想)

- 男女混合のペアもあって、話が互いにできるか心配したが、どのペアも話が盛り上がり楽しそうな顔で取り組んでいる様子がとてもよかった。

###### 【考察】

生徒は、自分の話を真剣に聴いてもらう体験を通して、受容的に聴いてもらうと気持ちがよいことを実感した。この体験により、生徒は言葉を言語として『聞く』から、言葉の裏に隠れた相手の思いを感じ取りながら『聴く』ことが、対話において重要な要素であることに気付くことができた。「会話が弾むように話の最後に感想を付け加えたり、途中質問をしたりできるようにしていきたい」などの感想からも、生徒の対話への意欲の高まりを感じることができた。

##### ② 学級活動Ⅱ(ステップ2)『グループでの協力の仕方』(情報を組み立てるGWT)

###### ア 活動のねらい

- 課題を解決するために自分のもっている情報を正確に伝えたり、仲間のもっている情報を聴いたりする中で話合いのスキルを習得する。
- グループで課題を解決することで仲間とかかわりながら学ぶことの楽しさを味わうことができる（協力の仕方・共感的な人間関係づくり）。



## イ 活動の内容

グループ（4～5人）全員の情報を合わせないと解決することのできない課題を設定することで、グループ活動の中で、自分の役割を果たすことの大切さを感じさせていく。この活動で、メンバー全員がかかわりながら聴き合うことで、生徒同士の対話が図れるようにした。最後にグループ・プロセスの振り返りを行い、「今、ここ」での自分や仲間の姿を思い出しながら、課題解決に貢献した生徒や意見を出しやすくしてくれた生徒は誰かをグループで話し合った。また、グループ・プロセスの振り返りでは、「自分」「グループ」「行動」に対する振り返りを図6の振り返りシートを使って行った。

## ウ 活動の様子

始めは課題にどう取り組んだらよいか分からず戸惑っていたが、少しずつ「○○しよう」「○○してみたら・・・」などの意見を出し合いながら、課題解決に向けた取組ができるようになった。また、課題に取り組む中で、生徒は自分のもっている情報を伝えるために、メンバーの情報にしっかりと耳を傾け、自分の情報と照らし合わせながら情報を伝え合っていた。時間が経つにつれ、それぞれの頭の位置が近付いてきた。さらに、始めはあまり自分の考えを言わなかった生徒も自分の情報を他のメンバーに伝えていくうちに、活発に意見を主張するようになってきた。課題が解決したときには、歓声をあげて喜んだグループもあった。



図5 情報を組み立てるGWT資料(抜粋)

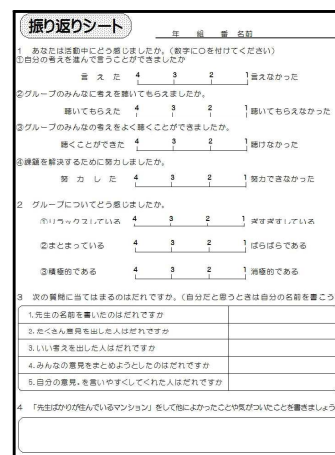


図6 振り返りシート

### 【授業後の生徒の感想】

- みんなで意見を出し合うのがすごく楽しくて、「自分たちで解きたい」と強く思った。
- 分かったとき、すっきりした。考えて意見を言うことが楽しかった。
- みんなの情報の一つにまとめてできあがったときはとてもうれしかったし、達成感がありました。いつもより班にとってもまとまりがあり、みんなが意見を言えました。でも、みんなが一斉に意見を言いすぎて、頭がパニックしてしまうことがありました。これからこういう場面があったら気を付けたいと思いました。
- あまり話したことの無い人ともたくさん話ができたと感じます。自分の意見もちゃんと言えたと思います。グループでまとまって、誰も抜けることなくできたと感じます。やってみるとみんながまとまってとても楽しくできました。話さない子とも話したりすると結構おもしろかったです。

### 【全体での振り返り(まとめ)】《1、2の評価をした生徒の発表(授業中の発言から)》

- みんなが意見を出していたところはとてもよかったけど、意見を最後まで聴かないうちに自分の意見を言ってしまうところがあった。
- 誰かが話しているのに、自分が話を始めてしまったり、話の途中で口を挟んだりしてしまっていた。もっとしっかり話を聴くようにしたいと思った。

### 【担任、授業を参観した教師の感想】

- 子どもたちの課題に真剣に取り組んでいて、みんなで意見を出し合っている姿がとてもよかった。自分の教科の授業でもこのくらい生徒が真剣に活動してもらえるようにしたい。
- 1時間の中で教師がしゃべった時間がとても少なく、生徒の活動の時間が多いこととその中でそれぞれが自分の考えをしっかりと伝えているところが見ていて楽しかった。

### 【考察】

生徒は、グループの中でそれぞれがしっかりと情報を伝えることや、しっかりとメンバーの話を聴くことが、グループ活動を活性化させる上で大切な要素であることに気付いていった。また、協力して一つの課題を解決したことにより、グループの結束が強まった。

## 2 見通し2について

### (1) 授業実践2「教科の授業におけるグループ活動を通しての人間関係づくり」

#### ① 理科「白い粉末状の物質を区別するには(第1時)」

##### ア 活動のねらい

グループで互いの考えを交流・共有しながら、既習体験(学習)や観察における気付きから課題解決のための手立てを見いだす。

ステップ1→互いの考えを最後まで受容的に聴く。

ステップ2→自分が観察によって発見した情報をグループのメンバーに正確に伝える。

グループ・プロセスの振り返り(自分に対する項目)を行う。

##### イ 活動の内容

4種類の粉末(砂糖、食塩、デンプン、チョークの粉)を配布し、見た目と手触りから粉末を区別し白い粉末状の物質が何であるかを、思いつくまま一人一人がワークシートに書いてから、互いの意見を伝え合った。生徒はルーペを使いながら、観察したり、手にとって見たりしながら、4種類の粉末を区別した根拠をワークシートに記入(自己決定)した。自分が予想した理由をグループの中でステップ1の「聴くスキル」を活用しながら、考えを伝え合った。その後、4種類の粉末を区別する方法を考え、出た意見を全体で確認をした。最後に次回の実験方法の確認をした。

##### ウ 活動の様子

白い粉末を観察しているときには、自分の思った根拠を観察しながら、他のメンバーに伝えている様子が見られた。身近な物質なので、今までの生活経験を振り返りながら観察する姿が見られた。

また、話し合いでは自分と異なる発表をした生徒の考えも最後までしっかり聴くことができていた。

##### (授業後の生徒の感想)

- 班で話し合ったとき、自分の意見はあまり言えなかったけどみんなの意見がちゃんと聴けたのでよかった。
- 自分の班では出なかった意見がまとめの中で他の班の意見を聴くことで分かってよかった。粉の特徴によって調べ方を考えられて、新たな発見があった。

##### (参観していた理科担当教師の感想)

自分が考えていた以上に生活経験が不足している生徒が多かった。生徒は粉末をじっくり観察していて、さらにその情報をメンバーで交流・共有している様子を見て、「聴く」「伝える」のスキルトレーニングの大切さを感じた。

##### 【考察】

聴くスキルを習得したことにより、他のメンバーが話しているときに、うなずきながら聴いたり、優しい表情で聴いていたりする生徒が多かった。また、グループになることで、普段全体で自分の意見を発言するのが苦手な生徒も、活発に意見交換ができていた。グループの話し合いの結果は、この日のリーダー(座っている位置でランダムに順番でリーダーは変わる)が発表した。学級全体が発表者の言葉をしっかり聴こうとする様子が伝わって、発表者も笑顔で発表できていた。また、グループの意見なので他のメンバーに支えられながら、安心して発表ができていた。

#### ② 理科「白い粉末状の物質を区別するには(第2時)」

##### ア 活動のねらい

役割を分担し、実験に取り組み、それぞれが得た結果(情報)を組み立て、考察する。

ステップ1→互いの考えを最後まで受容的に聴く。

ステップ2→自分の実験結果を正確に伝える。グループ・プロセス(行動)の振り返りを行う。

##### イ 活動の内容

4種類の粉末を4人で担当を決めて、物質の性質を調べる実験を行った。「水への溶け方」「加熱したときの変化」の様子を観察結果から、4種類の粉末を根拠を明らかにして、区別する実験を行った。グループ・プロセスの振り返りでは、グループの中で「意見を出した人」「いい考えを出した人」「意見をまとめた人」「意見を言いやすくした人」など、課題達成機能、集団

振り返りシート		平成23年 月 日
		1年 組 番 名 氏
1. グループのメンバーの中で、次の質問に当てはまるのはどれですか。(自分だと答えるときは自分の名前を書こう)		
1. 積極的に活動していたのはどれですか		
2. たくさん意見を出した人はどれですか		
3. いい考えを出した人はどれですか		
4. みんなの意見をまとめようとしたのはどれですか		
5. 自分の意見を言いやすくしてくれた人はどれですか		
2. 今日の授業で良かったこと、気づいたことを書きましょう。(各席の役割、グループ活動での取組の良かったことなどを書き留めておきましょう)		

図7 振り返りシート

維持機能の観点からの振り返りを行った。その中で、仲間からのフィードバックを受け、他者から見た自分やグループに気付いたことで、自己理解・他者理解を深めた。

### ウ 活動の様子

薬品を渡されると、粉末をじっくり観察する様子が見られた。自分なりの予想をもって、実験に取り組んでいた。実験中もグループのメンバー同士で「ほら、水に溶けた」「甘いにおいがしてきたから・・・」など根拠を述べながら、実験に取り組む様子が伺えた。

また、振り返りの場面では、どのグループも仲間の話を真剣に聴き合っていた。

**(授業後の生徒の振り返りシートの記入)**

- みんなで意見を出し合いながら考えられて、楽しかった。これからもみんなで協力しながらやりたい。
- いつもはあまり意見を言わない人がいい意見を言っていた。グループ全員が、自主的に考えていたのでとてもよかった。
- 色々意見が出てくるし、反対意見、賛成意見もあって、視野が広がっておもしろかった。
- 色々な意見が出て、色々な考えをして、頭をよく使ったと思います。みんなで考えると新しい考えも生まれてきました。
- 今日の授業での話し合いではみんなが意見を言って、よりよい意見を見つけ出すことができたと思う。また、ある人が一方的に言うということではなく、班全体が活気よく話し合いができて、勉強内容も理解できたので、次回もがんばりたい。

**(参観していた理科担当教師の感想)**

思った以上に話し合いが盛り上がり、どの班もしっかり取り組んでいた。生徒が自主的に活動し、考えを出し合っていた。また、グループでの振り返りをしたことで意見をまとめてくれる人や意見を言いやすくしてくれる人にも気付いていた。これからも、振り返りを定期的に行えるようにしたい。

### 【考察】

ステップ1で学習した「聴くスキル」を意識させたことが、グループで互いの考えを聴き合う雰囲気をつくった。その結果、活発な意見交換につながった。また、少人数での話し合いが意見を言いやすくしていた。振り返りの場面では「聴き方のポイント」を掲示し、再度意識させたことが互いのよさを認め合いながら、意見を伝え合うことにつながった。

## 3 事前・事後の質問紙の結果と教師の見取りからの考察

### (1) 学級の雰囲気と自己肯定感を把握する質問紙「C&S」の結果と考察

図8の結果から、「色々なアイデアが出されます」「新しいアイデアを試してみることが多いです」「自分たちで決めて、実行します」の質問項目で『非常にそう思う』の割合が増加している。これは本実践が、「話し合いの中で自分の考えを伝えること」や「仲間の意見を聴くこと」さらに、「考えたことを行動に移すこと」への意欲を高めたといえる。生徒はグループ・プロセスの振り返りを授業だけでなく、学校生活の活動などにおいても同様に活用するようになってきていると考える。また、「お互いのことをよく知っている」「友だち同士で相談し合う」についても、『非常にそう思う』の割合が増加している。「聴く」を意識したコミュニケーション活動が、生徒同士のかかわりを深め、安心して発言できるよりよい人間関係を形成したと考える。また、グループ・プロセスの振り返りにより、互いのよさを認め合ったことが、生徒の自己存在感を高めていった。GWTや教科の授業において、生徒はグループで協力して課題を達成する楽しさや喜びを味わうことができた。このことにより、学級の仲間意識が高まり、互いに認め合う学級の雰囲気が形成された。

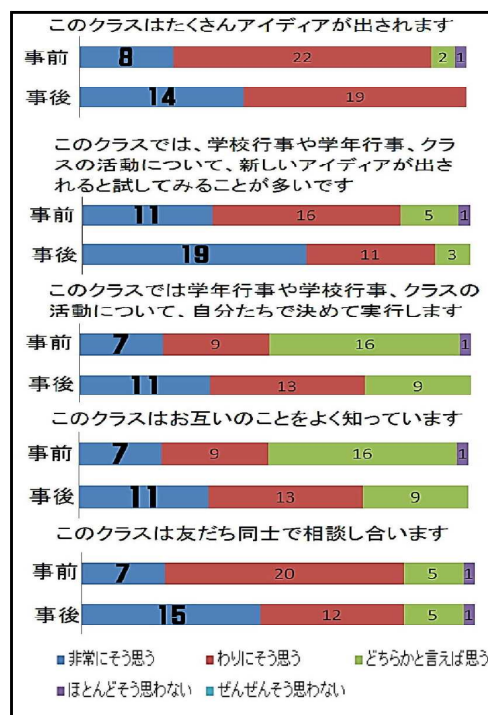


図8 C&S質問紙の結果



## (2) 学校環境適応感尺度「アセス」の結果と考察

学校環境適応感尺度「アセス」学級平均表			
適応次元		実践前	実践後
生活満足感		54	57
対人関係の適応感	教師サポート	62	65
	友人サポート	59	62
	向社会的スキル	56	56
	非侵害的関係	60	62
学習適応感		48	49

図9 「アセス」学級平均

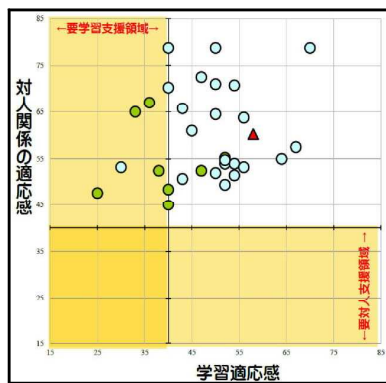


図10 プロット図(実践前)

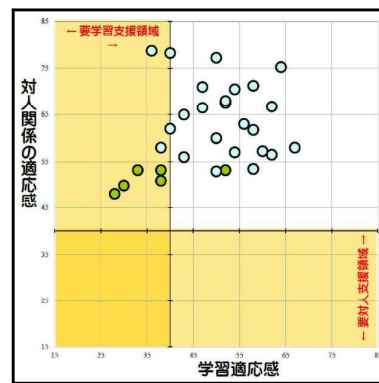


図11 プロット図(実践後)

学校適応感尺度「アセス」の学級平均(図9)の結果から、「生活満足感」「教師サポート」「友人サポート」「非侵害的関係」「学習適応感」の数値が実践後に高くなっている。この結果から、学級の雰囲気が互いに支援し合って生活するようになったことで対人関係の適応感が高まったことが読み取れる。図10(実践前)、図11(実践後)のプロット図を比較すると、全体的に右斜め上に移動してきている。これは、対人関係の適応感が高まったことにより、学習適応感も高まったことを示している。

## (3) 実践後の生徒の変容(担任・教科担当教師の見取りから)

### (担任の見取りから)

- 単元テストや宿題などの取組がよくなった。また、互いに向上しようとする言動が増えた。
- グループやクラスでの話し合い活動が活発になり、賛否両者の意見を聴く姿勢が出てきた。

### (理科担当教師と体育担当教師の見取りから)

- スムーズに話し合いに取りかかるようになった。また、以前よりも多くの生徒が話し合いに参加できるようになってきた。その結果、どのグループも活発に意見交換ができていく。
- 実験作業をする際には一人が全部やってしまうのではなく、自然と係を分担したり、協力したりして作業を進められるようになった。
- 話し合いが活発になったことで、以前はほとんど考察を書けなかった生徒が、具体的な考察を書けるようになってきた。授業の感想も前向きなものが多くなってきた。
- 体育の授業では、互いにアドバイスする中で、1年生としてはハイレベルな意識をもって実践に活かしている場面が、多く見られた。

担任・教科担当教師の見取りから、生徒は学習に前向きに取り組むようになってきている。GW Tの流れを教科の中でも活かされていることが、この感想からも伺える。生徒はグループ・プロセスの振り返りをきっかけに、日常生活でも自分や仲間の行動に「気付く」「考える」「試す(やってみる)」の過程を踏まえて生活するようになってきていると考えられる。学級の雰囲気が受容的になったことや、協力して課題に取り組むことの楽しさや協力の仕方を理解したことにより、生徒一人一人が自分の役割を考え、行動しようという意欲につながったと考える。そのため、学級内で自分の考えを言いやすい雰囲気ができ、それぞれが互いの考えを聴き合う関係がつけられた。生徒は、その中で自己決定し、自己決定の行動が学級の仲間から認められる(共感される)ことで、自己存在感を感じながら、生活するようになってきた。このことが、生徒の対人関係の適応感を高めたと共に、生活満足感や学習適応感にも影響を与えたと考える。

## VII 研究のまとめ

### 1 成果

- 学級活動の時間に行った「対話への意欲を高めるスキルトレーニング」が、学級に話しやすい雰囲気を形成した。また、相手の気持ちを考え、行動することへの意欲や態度につながった。GW Tでは、協力して活動に取り組むことで得られる満足感を感じることができた。このことによ

り、学級全体が他者に配慮しながら、積極的に対人関係を築こうとする雰囲気になってきた。

- 活動後にグループ・プロセスの振り返りを行ったことにより、生徒はグループ活動での自分や仲間の様子が気付くことができた。この気付きが、生徒一人一人の自己理解・他者理解を深めたと共に、互いの考えや行動を認め合う雰囲気を形成した。その結果、生徒の対人関係の適応感を高めることができた。

## 2 課題

- 教科の授業にグループ・プロセスの振り返りを行うための時間設定を工夫する必要がある。
- 「聴く」「伝える」に視点をおいたスキルトレーニングは、学校全体の取組として行うことが望ましい。そのために、学級活動の年間指導計画への位置づけを明確にし、実践計画を作成する必要がある。

## 3 実践を終えて見えてきたこと

本研究では、学級の中に共感的な人間関係をはぐくむために「受容的な聴き方」と「情報を組み立てるGWT」を行った。グループ・プロセスの振り返りで、生徒はメンバーからのフィードバックにより、「自分の行動がどう思われていたか」「メンバーそれぞれが相互に影響し合っていること」などに気付くことができた。また、グループのかかわりの中で互いに認め合う（共感し合う）言動が、生徒の「やってみよう（試す）」という意欲を引き出すことにつながった。図12のように、グループ・プロセスの振り返りにより見いだされた「自己決定の行動」が、グループのメンバーや学級の友達や教師などに認められる（共感される）ことで、生徒の自己存在感が高まっていった。このように、各教科でのグループ活動の中に、よりよい人間関係を形成していくことを目的とした振り返りを取り入れたことが、生徒の対人関係の適応感を高めていくことにつながった。今回は、理科の授業での実践だったが、他教科においても同様の実践ができると考える。また、対人関係の適応感が高まると、学習や生活の場面においても、互いに認め合いながら、主体的に活動していくようになってくる。このことが、生徒の学力向上につながっていくと考える。



図12 生徒指導の機能を活かした授業

このように、各教科でのグループ活動の中に、よりよい人間関係を形成していくことを目的とした振り返りを取り入れたことが、生徒の対人関係の適応感を高めていくことにつながった。今回は、理科の授業での実践だったが、他教科においても同様の実践ができると考える。また、対人関係の適応感が高まると、学習や生活の場面においても、互いに認め合いながら、主体的に活動していくようになってくる。このことが、生徒の学力向上につながっていくと考える。

## 4 提言

### 対人関係の適応感を高めるために

- 「聴く力」「伝える力」の向上を図り、共感的な人間関係をはぐくみましょう
- 協同して活動する機会を増やし、活動では一人一人に役割をもたせるようにしましょう
- 教科の授業などに、グループ・プロセスの振り返りを取り入れるなどして、互いのよさを認め合う場面を取り入れていきましょう

### <参考文献>

- ・栗原 慎二・井上 弥 編著 アセスの使い方・活かし方 ほんの森出版(2010)
- ・河村 茂雄・品田 笑子・小野寺 正己 著 いま子どもたちに育てたい学校ソーシャルスキル 小  
学校高学年 図書文化(2008)
- ・日本学校GWT研究会 編著 改訂 学校グループワークトレーニング 遊戯社(2004)
- ・星野 欣生 著 人間関係づくりトレーニング 金子書房(2003)

(担当指導主事 周藤 健司)